

# MSGをめぐる主導権争いと 各国の思惑

太平洋協会 客員研究員 黒崎 岳大

太平洋島嶼地域における地域統合あるいは地域共同体といった場合にまず思い浮かべるのは、太平洋諸島フォーラム(PIF)である。1971年に設立されて以降、同地域で独立国が誕生するとともに拡大していき、現在は豪州とニュージーランド(NZ)という域内先進国を含む16カ国で構成されている。

加盟国内では、おおよそ域内で経済や安全保障の分野でのより一層の協力体制を追求していくことでは共通した認識を持っている。だがしかし、今後の展開に関する将来像、すなわちEUやASEANのように地域共同体に向けて取り組んでいくのか、あるいは現状の共通課題について話し合う会議体として存在させていくのかについてはそれぞれの国々の周辺ドナー国との関係もあり、明確なビジョンが示されているとは言えないだろう。

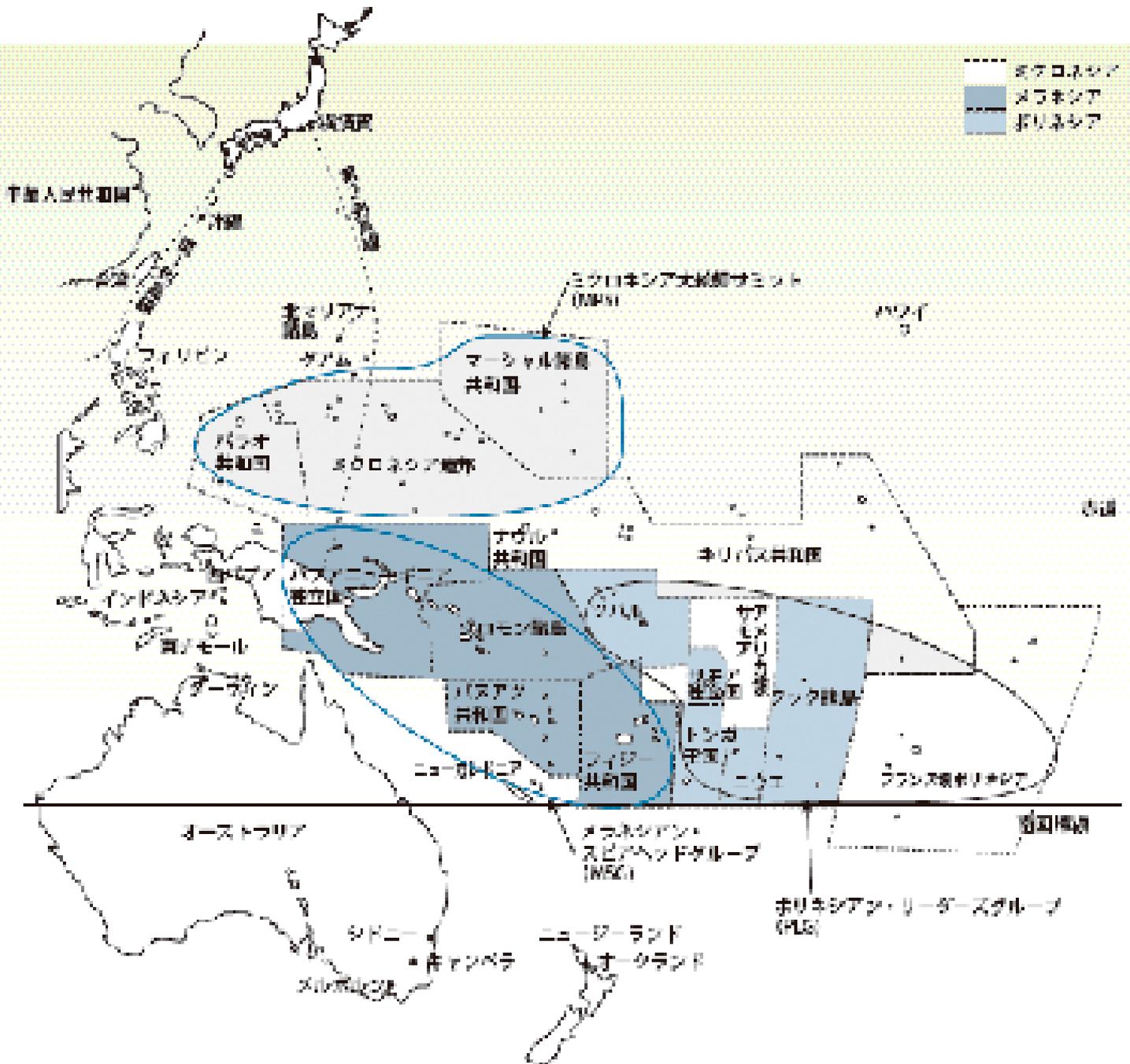
こうした中、PIFを構成する国々においては、PIFの下部グループ内で協力関係を組織化していく動きが近年盛んとなっている。ポリネシア地域では、サモアやニウエ、クック諸島などが中心となり、ポリネシア地域での共通課題(移民問題や環境問題)について話し合うポリネシア・リーダーズ・ミーティング(PLM)が設立された。また旧日本の委任統治領を経験したミクロネシア連邦、パラオ、マーシャル諸島の3大統領が持ち回りで共通課題について話し合う「ミクロネシア大統領サミット」が開催されてきたが、2016年の会議でグアムや北マリアナ諸島なども包含した形でフォーラム化させていくことが確認された。これらのサブリージョナルグループの先駆的な存在としてメラネシア地域の国々を中心に設立されたのが、メラネシアン・スピアヘッド・グループ(MSG)である。同機関本部はバヌアツの首都ポートビラにある。MSGの本来の目的はメラネシア地域における貿易協定を目的とした協力関係の構築であった。このような発想に関しては、すでに1970年代にはソロモン独立の立役者として知られているママロニ首相がメラネシア地域における政治、国防などでの同盟を目指すことをその政策の中で掲げる構想があった。こうしたメラネシア地域内での同盟構想がもとになり、1986年にパプアニューギニア(PNG)、ソロモン諸島、バヌアツの間で正式に政治

グループとしてMSGが設立される。その後、同会議は経済協力関係の性格が強まり、1993年に3カ国で貿易協定(MSGTA)が締結された。

一方で、MSGのメンバーシップは次第に拡大していく。1989年にはニューカレドニアにおける原住民カナックにより構成されたフランスからの独立を目指す「社会主義カナック民族解放戦線(FLNKS)」が正式に加盟した。さらに地域内での貿易協定の重要性を認識したことにより、1996年にはフィジーもMSGに加盟し、98年にはMSGTAにも参加した。もともとメラネシア地域は、太平洋島嶼国地域の中では、国土面積も広く、海洋資源以外にも木材や鉱物資源においても潜在的な可能性を有していた。またPNGをはじめ人口も比較的多いと同時に、同グループ内では伝統的にビッグマンと呼ばれる大酋長がリーダーとして選出され、社会を牽引していく慣習も共有していた。この点からすると、PIFと比べて、MSGの方が加盟国政府の中ではより緊密で身近なグループとしての意識されてきた。

ところが、ここ数年このMSG内での問題をめぐり加盟国内での対立がしばしば指摘されるようになってきている。とりわけ、ここ数年は新たなメンバーシップをめぐる問題と、新しい事務局長の人事をめぐる抗争が原因となり、加盟国内での不協和音が見られるようになってきた。新たなメンバーシップをめぐる問題として、西パプアをめぐる代表権の問題があげられる。インドネシアからの独立を求めているメラネシア系の西パプアの活動家たちは、ニューカレドニアがフランスからの独立することをMSGが支持し、FLNKSがMSGのメンバーとなっていることに注目し、自分たち独立運動を進めるグループもMSGに加盟することを望むようになった。ところが、2015年6月にホニアラで開催された会議において、インドネシアが準加盟国となったのである。一方、インドネシアからの独立を求めている「西パプア連帯自由運動(ULMWP)」はオブザーバーの地位にとどまった。本件をめぐるのは、フィジーのバイニマラマ首相は、「西パプアがインドネシアの一部であることは明白であり、西パプアおよびその住民を代表する

## 太平洋島嶼地域のサブリージョナルグループ



のはインドネシア政府に他ならない」と述べている。とはいえ、メラネシア系の同士であると考えていたULMWPのメンバーたちからすれば、この結果は納得のいくものではなかった。この問題の背景には、インドネシアをはじめとした東南アジアとの関係強化を望むメラネシア諸国の思惑の存在が推測される。インドネシアと国境を接してい

るPNGにとっては政治上あるいは安全保障上の観点からインドネシアとの対立を有することは得策ではない。また、現在の国際経済における牽引役としての東南アジアという観点から見ても、同地域に資源や人材を供給することで、ビジネスにおけるメリットを見出そうという点からも、西パプア問題をメラネシア・アイデンティティという立

場から大きく取り上げるまでには至らなかったの  
である。

2016年に入り大きくクローズアップされた問題  
として、事務局長人事をめぐる異議申し立てとい  
う問題があげられる。ピーター・ファラウ前事務  
局長がMSGへの財政支援不足と加盟国内での支持  
が一様でないことに不満を表明し、2015年に突然  
辞意を表明した。後継人事をめぐるのは16年4月18  
日にフィジーの外交官で太平洋諸島開発フォーラ  
ムの暫定事務局長であったアmena・ヤウボリ氏に  
対する内定がなされ、議長国であるソロモン諸島  
のソガワレ首相が雇用契約書に署名した。ところが  
この人事をめぐる、一週間後にバヌアツのサル  
ワイ首相が突如「本件選出の過程について公正・  
公開性・透明性に逸脱している」と異議を申し立  
て、同国のロイ・ジョイ氏を推薦した。この件に  
ついて、PNGも在ソロモン大使を通じて、ソガワ  
レ首相に再度事務局長選出選挙を実施するように  
要請、事務局長は全加盟国首脳が集まった場で全  
員合意の下で選ばれるべきだと非難した。結局、7  
月15日に開催されたMSG総会においてヤウボリ氏  
が事務局長に選出されたものの、事務局長人事を  
めぐり議論は、フィジーとPNGの間で対立を表面  
化させることとなった。

この両国の間での主導権争いという図式は、太  
平洋島嶼地域において以前から存在していた。  
フィジーと言えば、太平洋の十字路として、植民  
地時代から太平洋島嶼地域の中心として発展し、  
独立後もPIFの原加盟国として常に太平洋諸島地  
域の中心的な存在であった。かたやPNGは、PIF  
への加盟は遅れたものの、同地域最大の国土面積  
と人口を抱え、またメラネシア地域のビックマン  
的な存在として君臨してきた。MSGにおいては、  
フィジーは明らかに新参者である。そのため、従  
来まではフィジーはPIFの方に関心を持ち、PNG  
はMSGを中心に近隣諸国との関係を捉えている傾  
向が強かった。

ところが、近年その傾向に変化が生じてきてい  
る。2006年のクーデタをきっかけに、フィジーは  
豪州・NZなどから経済制裁を受け、2009年には  
PIF資格停止処分を甘んじることになった。こう  
した中で、フィジーはバイニマラマ政権の下、新  
憲法制定、選挙制度改正など、政治の民主化を進  
めていく。2014年に総選挙を成功裏に終えると、  
豪州・NZが影響力を増してきたPIFに対して組織  
改革を求めるようになる。

一方、フィジーが資格停止中にPIFにおける立

場を強化していったのが、PNGである。とりわけ  
オニール首相の就任後は、豪州との関係強化を進  
める一方、自国から産出されるLNGの輸出を通じ  
て得た財源をもとにソロモン諸島などに経済支援  
を行うようになる。さらにPIFに対しても、2014  
年の総会で新事務局長として自国の外交官であっ  
たメグ・テラー女史を送り込むことに成功した。  
フィジーがいない間にPNGはPIFにおける主  
導的な立場を確立したと言えるだろう。同じメラ  
ネシア地域の仲間として支援を期待していたフィ  
ジーとしては、こうしたPNGのしたたかな外交を  
不快に感じていたことを想像するのは難くない。  
自国の外交官であり、PIFに対抗するために設立  
したPIDFの前暫定事務局長をMSG事務局長に就  
けたのも、PNGへの対抗意識の表れとして捉える  
のが自然であろう。

メラネシア地域は政治的な対立や政治抗争を繰  
り広げてきた地域でもあり、今回のフィジー対  
PNGという構図もその一環としてみるのであれば  
不思議なことではない。一方で、2015年にヌーメ  
アで開催されたMSG会合では、域内のサービス、  
投資、通信、Eコマース、労働者の自由移動など  
を含む新貿易協定(MSGTA3)が進められるなど、  
ビジネス上の関係は強化されてきている。政治的  
な思惑や理想と経済的な実利・国益を両天秤にか  
けながら、メラネシアの国々は国際社会の中を生  
き抜いていこうとしているのである。

#### 【参考文献】

黒崎岳大・今泉慎也編 2016『太平洋島嶼地域における  
国際秩序の変容と再構築』(研究双書No.625)アジア経  
済研究所。



バヌアツ共和国ポートビラにあるMSG本部